**第９回大会報告記**

**嶋村　優枝**

　 残暑が長引いてはいるものの気持よく晴れた空の青さと彼岸花が秋を知らせてくれるなか、第９回アイリス・マードック学会が１０月６日法政大学市ヶ谷キャンパスで開催された。学内のボワソナードタワー２６階会議室を会場に、１１時より総会、午後には研究発表、特別講演が行われた。

　総会は、橋本信子先生の司会で、二年振りに室谷洋三先生の会長挨拶から始まった。奥様、御子息に伴われてご参加の先生は、ようやく以前の体力を回復なさったところだそうで、健康の大切さと学会の発展への期待を述べられた。また、これまで読みたかった様々な作品を読む中、宮沢賢治の全集を多少マードックと関係があるような調子で読んだが、そのうちまとまった報告をしたいとのことであった。平井杏子先生から、総会に先立って行われた理事会の報告があった。次回は岡山で１０月第三土曜日に開催予定、会場は未定。来年は第１０回目の大会となるため、新しい展開を計画中とのことで、シンポジウムを加えるなどの案が示された。更に、１０周年記念事業として、マードック全作品の内容紹介をまとめた一般向けの入門書の出版が提案された。駒沢礼子先生からは、事務局の1年間の活動報告があった。1月のニューズレター第８号発行と同時にHPにも掲載、９月には会員の業績を紹介。HP作成に関しては平井先生に御尽力戴き、９月末で５２００件のアクセスがあった。HPの充実のため、マードック関連の著作の情報を寄せてほしいとのこと。第８号のニューズレターより、会員名簿は別にして配布するように変更された。小野順子先生から、例年通り詳細な会計報告があり、次年度予算案によって１０周年記念事業へ向けて財政面での確認ができた。

　午後は、研究発表の前に、改めて平井先生から１０周年記念事業内容の説明があり、午後から参加の会員にも意見を聞いた。出版には賛同が得られ、本の内容に関してはいくつかの考えがあったが、理事が叩き台を作ることで決着した。

　小野順子先生の司会で、駒沢礼子先生の「『砂の城』の向こう側－*The Sandcastle* (1957)試論」が発表された。元教師である駒沢先生は教育現場が舞台であることに興味を持ち、今回の発表になったと紹介された。資料に添えられたカラーのタロットカードの解釈は解り易く印象深いものとなった。榎本眞理子先生の司会で大槻美春先生が発表された「『海よ、海』－チャールズの語りと神秘」は、マードックが画家になりたかったこともあり、絵画を通じて展開する。内容に合わせて、ここでもカラーの絵画が添えられ理解を助けた。前大会もそうであったが、プリンターの性能向上で資料が美しく、言葉だけでは解り難い部分を大きく補っている。

　３時から、井内雄四郎先生の司会で蛭川久康先生の特別講演があった。「アイリス・マードック断想－自転車と一角獣」と題して、映画「アイリス」の新聞紹介記事の写真から始まった縦横無尽のお話に時が経つのを忘れ、興味深い質問が続出して４時４６分まで延長された。平井先生の閉会の辞は５時１０分を過ぎていた。

　引き続きタワー２６階でラウンジに場所を移して懇親会が開かれた。蛭川先生の御講演後の高揚感に浸りながら、井内先生の音頭で乾杯。室谷先生の二年振りのスピーチは１年前の御病気からの回復を語られた。蛭川先生は、直前の特別講演について「一見バラバラな物がひとつにまとまる楽しさを共有できた」とおっしゃった。野中涼先生は、1971年のメモをもとにマードックに会った時の会話などをユーモアたっぷりに披露して下さった。会場からの素晴らしい眺望に感動しつつ、会場を用意して下さった法政大学の山本長一先生に感謝して閉会となった。